

詩編 第56編 1節

「神よ、私をあわれんでください。人が私を踏みつけ、一日中、戦って、私をしいたげます。」

酷暑のなか、幼子が叫びながら歩道に行く。彼の少し前に日傘をさしながら母親が歩いている。母親に向かって「いやだ」「待って」「・・・」聞き取れない言葉をも含めて、母親の背に叫ぶ。母親の歩くペースはあまり変わらない。それを追うように叫ぶ。叫ぶ幼子も暑い最中懸命である。何がいやなのか叫びからはくみ取れない。待ってはわかりやすい。淡々と前を歩く母に待つように叫んでいる。

酷暑の路上で叫ぶことが出来る母がいる。叫びを聞く母がいる。叫ぶ幼子に振り向いてくれない母がいる。しかし、確かに叫びを聞いている。それだから、幼子は叫びながらも母の背を追い続ける。やがて、母は後ろを向き、幼子を待つ。叫んだ幼子の手をとり、歩道をさらに進む。

神よ、と叫ぶ。そこにおられる神に叫ぶ。これまで何度叫んだろうか。その度、叫びは聞かれた経験をしただろう。そうでなければ、他の言葉をいっさい挟むことなく、無条件に叫ぶ。初めの言葉が、あわれんでくださいである。私が人により踏みにじられる。戦いを挑み続ける。神のあわれみが不可欠。

2024年8月2日